

東北大学全学教育「歴史と人間社会」（1年生）授業実践報告

野村，啓介
東北大学大学院国際文化研究科：教授

<https://hdl.handle.net/2324/4822586>

出版情報：オンライン授業の地平：2020年度の実践報告，pp.82-82，2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International



1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本講義は、2020 年度後期の全学教育として開講された基幹科目「歴史と人間社会」(主に1年生対象に 2 コマ)であり、ヨーロッパ史入門のための「ワインのヨーロッパ史 — 銘醸地フランスを中心に —」をテーマとする。

講義の目的は、ワインがヨーロッパ文化の理解に不可欠な要素のひとつであるという基本的視角から、ヨーロッパ文化の諸相を歴史的に考察し、歴史的考察力を養うことである。そのなかで、大学教養レベルにふさわしい歴史的考察力を涵養するために、(1)ヨーロッパ史に関する既存の説明を批判的に検討し、(2)歴史事象を自由な観点から考察できるようになること、すなわち思考プロセスを重視し、一問一答式に慣れた頭を改造することをめざす。なお補足的に、「ワイン基礎学」も盛りこみ、シラバスには「社会に出て恥をかかない程度のワインについての教養・マナーなど、知っておきたい基礎知識も含まれる」とのメッセージも併記した。

授業内容としては、古代から現代にいたるヨーロッパワイン文化の歴史的展開について、高校世界史レベルの復習も進めながら平易に解説した。専門用語の理解を促進する一環として、フランス語表記をカタカナ表記できるようなおく初歩的な発音の知識を身につけることも盛りこんだ。授業内容の復習としては、ワイン文化理解のための宿題を課した。成績評価の方法としては、平素の受講態度 70%、期末試験 30%により総合的に評価することとし、課題遂行など普段の地道な学習プロセスを最大限に評価した。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

オンライン授業では、ISTU(東北大学インターネットスクール)による授業風景を録画してオンデマンド配信をおこない、資料配付のためには大学が使用を推奨する Google の Classroom を併用した。ただし、11 月からの 2 か月間はコロナ禍がやや落ち着き、対面形式での授業も解禁されたため、オンデマンド方式と並行して授業収録の「見学」という名目で希望者に教室に

集まってもらった(しかし 1 月はオンラインのみに逆戻り)。

通常であれば、本授業は学生との対話をふんだんに織りませ、そのなかで学生にどのような知識が不足しているのかということを探りながら進めるスタイルである。時には脱線話に流れるが、当然ながら授業内容の理解に資するよう禁欲する。しかし、オンラインだと一方的に進めざるをえず、脱線話どころか、学生の反応さえわからないため、非常にやりづらかったことは間違いない。「高校 4 年生」に対処する心がまえで、自己の精神年齢を大幅に下げて気さくに対応するスタイルであるだけに、打撃はいっそう大きかった。

11 月以降、大学からは可能なかぎり多くの授業を対面形式で実施してほしいとの強い要請があったが、笛吹けど踊らずといったところで、他の大多数の授業がオンラインで実施されつづけたため、本授業でも自宅で視聴を継続する受講生は 6~7 割にのぼった。

受講生へのアンケートでは、対面形式に参加できたことに大きな意義を感じたという感想が多数を占め、しかも対面形式の授業が本講義のみだという声さえあった。オンラインのみでの参加者には、つい甘えてしまい怠惰な生活習慣を抜けだすことができなかったという声が多かった。さらに、オンラインで実施される他の科目での課題が膨大となり、本授業の宿題をする時間が確保できないという悲痛な声も届いた。技術面では、ISTU の画質が悪い、動画が途中でフリーズするなどといった悪評がめだった。他方、授業情報が一元化されていないため不便であったとの声もあり、ISTU と Classroom を併用したことの弊害が明らかとなった。いずれの点も改善の余地があり、今後の試行錯誤のための手がかりとしたい。